



【死ななければならぬのなら、死にます！】

今日の本文:エステル記 4章11-17節/ 今週の暗唱聖句: 詩篇139:8-10節

説教者: 鄭南哲牧師
(Rev. Jung nam-chul)

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！一週間も主にあつて霊も、心も、体も守られ、平安に過ごせましたか。17番目の旧約の御言葉はエステル記です。このエステル記はバビロンの捕虜期間中にあつた出来事が記録された聖書です。先週申し上げたように、バビロンの捕虜に行ったユダヤ人たちは70年が過ぎた後、新生王国であるペルシアの王クロスの勅令によって本国に戻ります。それで紀元前536年ヨシュアとゼルバベルの指導によって本国に戻り、崩れた神の神殿を建て直します。それから約80年が過ぎた紀元前458年には第2次帰還がありました。この時の指導者がエズラでした。そして14年後、焼き尽くされたエルサレムの城壁を再建するためネヘミヤの導きによって第3次の帰還があつたことを申し上げました。

今日のエステル記は第一次帰還と第二次帰還の間、つまり、紀元前487年から465年の間にあつた出来事です。このエステル記を通して、イスラエルに戻ることができず、ペルシアのバビロン地域に残されていたイスラエルの民に対して知る事ができます。小説のようなドラマチックなエステル記ですが、確かに歴史的事実であつた事を裏付ける記録と考古学（こうこがく）的証拠、当時の制度や慣習などがこれらのすべてを証明してくれます。（参考、聖書の題目が女性の名前でできている聖書は異邦の女であつたルツによる内容のルツ記とユダヤ人の女であるエステルに関するエステル記二つだけです。）

＜エステル記の内容＞

エステル記の内容はペルシア帝国のアハシュエロス王の時の話です。1章1節によるとペルシアの王アハシュエロス (Ahasuerus) が出ていますが、一般の歴史の本に出てくるクセルクセス (Xerxes) 1世 (486-465BC) です。アハシュエロスはヘブル語でクセルクセスはギリシャ語からの英語式表記です。彼はクロス王 (550-530BC)、カンビセス王 (530-522BC)、ダリウス王 (522-486BC) に続くペルシア帝国の四代王として、紀元前486-465年、約21年間統治していた王でした。アジアのインド、パキスタンからアフリカのエチオピアとスーダンまで127州の広い地域を治めていた王として知られています。

このアハシュエロス王がある日、大きい宴会を催（もよお）して、すべての家臣たちのまえで、王妃ワシュティの美しさを見せるために宴会に出るようにと命じました。ところが王妃ワシュティは王の命令に拒んで宴会に来ませんでした。当時絶対権力をもっていた王は宴会に参加した多くの人々の前で困ってしまいます。怒りで燃え上がっていた王は即ワシュティを廃位（はいい）させ、新しい王妃を公開的に探します。今日でいうと全国的美人大会が開かれ、その中で神様を信じていたイスラエルのユダヤ人処女であるエステルが選ばれます。王妃ワシュティが廃位されて4年ぶりにペルシア人ではない捕虜の身分のエステルが奇跡的な神の恵みによってペルシア帝国の王妃になったわけです。エステルは親がいなかったので、おじであつたモルデカイによって育てられた女でした。

さて、ペルシアの首長たちの上にいた要するに総理だつたハマンはユダヤ人たちをとつても嫌っていません。ハマンはペルシア帝国の第二人者でした。すべての人が彼にひざをかがめてひれ伏しましたが、唯一城門を守る家来に過ぎなかつたモルデカイだけがそうしませんでした（エステル3:2-4）。なぜモルデカイだけが総理であるハマンにひれ伏さなかつたとすると、モルデカイはベニヤミン族のサウル王の子孫（第一サムエル15:7-9）でしたが、ハマンはイスラエルの長い敵だつたアマレック王アガグの子孫（エステル3:10）だつたからです。

モルデカイが自分にひれ伏さなかつたことに腹を立てたハマンはモルデカイについて調べた結果、彼がイスラエルのユダヤ人であることが分ります。そういうわけで彼はすべてのイスラエルのユダヤ人たちを殺そうと陰謀を企てます（エステル3:6）。そして、イスラエル人たちを虐殺する日として12月に該当するアダルの月の13日、日にちまで決めておきました（3:7）。

12月13日！ハマンは王の許可までいただいて、一瀉千里に決め片付けようとしします。すべてのユダヤ人たちを殺す日として施行する文章がすべての民族の公示されました。エステル記3章13節によると“書簡は急使によって王のすべての州へ送られた。それには、第十二の月、すなわちアダルの月の十三日の一日のうちに、若い者も、年寄りも、子どもも女も、すべてのユダヤ人を根絶やしにし、殺害し、滅ぼし、彼らの家財をかすめ奪えとあつた。”と命じました。

12月13日！イスラエルの全ユダヤ人たちを殺そうとする虐殺陰謀はユダヤ人たちにとっては絶対絶命の危機一発でした。ペルシア帝国に残されているすべてのユダヤ人たちは大きな悲しみの中で断食し、荒布を着て灰の上に座って

いる人が多くありました(4:3)。モルデカイは事態の深刻性を察してすぐさま王妃になったエステルにこの問題を解決してくれる王に出てこれを解決してもらおうようにと要請します。しかし、これは決して簡単なことではありません。なぜなら、当時王宮の法として、王の身を守るためと王としての威厳を立たせるために、王からの呼び出しなしに王の前に出ることは死刑に値する重罪（じゅうざい）になったからです。

ですから、王の許可なしに王に会いに行くことは王を殺そうとするのか、謀反(むほん)をたくらむ行為としてみなされすぐ処刑を受けたのです。その当時、エステルも王に30日間も召されなかった時であって、この王宮の法をよく知っていたので、自分から先に王に行くことすら恐れていたかもしれません。王妃の地位から下ろされることだけではなく、自分が死刑になる危険もあったからです。それにもかかわらず、“あなたが神様の恵みで王妃になったのは神様の民を救う今の時のためではないか?”というモルデカイの切なる忠告を聞いて、エステルは“死ななければならぬのなら、死にます。”という覚悟で王に出て行きます。それが先ほど読んだ本文の内容です。

イスラエルの民は三日間エステルのために断食しながら神様に祈ります。そして、エステル自信も三日間神様に断食の祈りをささげます。そして、王のご好意を受けるために、美しく、飾って、しかし、王の許可なしに王の前に行きます。“死ななければならぬのなら、死ぬ”という信仰の覚悟で王の前に行ったのです。

(この順序をよく覚えて下さい。危機の瞬間、まず神様の御前で断食しながら切に神様の助けを求めた後、人のやれる限り最善を尽くして、その結果は神様にゆだねる生き方。！これこそが信仰の生き方ではないでしょうか!)

じゃ、その結果どうなったのでしょうか? 意外とアハシュエロス王はエステルを見て、喜んで金のしゃくを差し伸ばして迎えます。これに力を得たエステルは二日間宴会を開いて王と総理であったハマンを招待しました。宴会の始めの日に招待され、宴会を終えて王宮を出るハマンに怖いものなんか何もありませんでした。なのに、またモルデカイが自分におじぎもせず、恐れていないのをみて憤りに満ちて、まずモルデカイを処刑をするために高く木の柱を立てさせます。

その日の夜、喜んだ王は不思議に眠れなかったので、記録の書である年代記を読ませました。ところが、その中で、以前モルデカイが王を殺そうとする陰謀を知って、報告して王が殺される事から守られた事が分りました。それにもかかわらず、そのモルデカイに何の報いがなかった事を知ってすぐ総理ハマンを呼びました。王はモルデカイだとは言わず、特別に王からの栄誉を与えたい人にはどうすればいいのかと、聞きます。総理ハマンは自分だと勘違いして、栄誉を与えたい者に、王服を着させ、その人を馬に乗せて、町の広場に導かせ、その前で王に栄誉を受けたものだとふれさせるようにと提案します。王はハマンが言ったとおりに、モルデカイをそうするようにと命じます。ハマンによって柱に掛けられて死にそうになったモルデカイが王からの栄誉を受けて、すばらしい待遇を受けたのです。

宴会の二日目の日、エステルは王とハマンをまた招待します。王妃エステルによって嬉しくなった王はエステルに何がほしいのかはずねます。王国の半分でもかなえてやろうと言います。この時、エステルはその場にいるハマンのユダヤ人虐殺陰謀を明かし、自分の民族を救ってくれるようにと訴えます。王はこれを聞いて、憤って、宴会場を出てしまいます。その瞬間、真っ青になったハマンは居残って、エステルに命ごいをするためにひれ伏しています。戻って来た王は、ハマンが王妃に乱暴しようとするのだとさらに王は憤って、彼を処刑させました。結局モルデカイを殺そうと用意しておいた木の柱にハマンがかけられ、ハマンの代わりにモルデカイがペルシアの総理になります。そして、イスラエルの民はみな虐殺の危機から救い出されたという内容がエステル全体の内容です。何の力もなく、どうしようもできない危機におわれた神の民をそのままおかせないで、予め、この時のために備えておいた少数(しょうすう)の神様の人々をとおしてすばらしい大逆転の勝利で神様が救ってくださったので、イスラエルの民はプリムという日を定めて、代々、この日を覚えて守るようになります。これがまさにエステル記の大逆転の内容です。

<エステル記の教訓>

まず、エステル記は神を信じるご自分の民への神様の御守りを表してくれます。

ご自分の民を顧みて下さる神様の御守りについては旧約聖書の様々なところで証しされています。兄たちによって見知らぬところに身を売られて行ったヨセフがポティファルの妻の誘惑を拒んだことでまた13年間牢に入れ、絶望の状況においても神様は彼を生かし、ヨセフを通して飢饉の危機からイスラエルを救い出してくださいます。出エジプトの出来事もエジプトの長い奴隷生活から苦しみと絶望の中で終わりそうになったイスラエルの民を救い出し、やしなっただ下さる神様の御業が表されます。それだけではなく、イスラエルの民の不従順と偶像崇拜によって他国に70年間捕虜として捕えられていった時も、御民を帰還させ、今日の本文のようにペルシアに残っていた者たちさえも、集団虐殺の危機においても神様は神様を信じて、仕えていた御民を守ってくださったのです。

神様は歴史において危機のあるたびにご自分の民を守ってくださいました。日本も世界歴史においても見出せないほど300年近く、キリスト教の迫害の歴史の中で、キリスト教が完全に根絶やしにされそうな絶望と苦しみの中でも、

信仰の人々を守り、顧みてくださって、いま私たちがこんなに自由に神様に礼拝をささげるようになってい
てはいませんか? エステル記は死にそんな状況においても約束されて信仰の民を守ってくださる神様、その神様が昔
もいまも変わることなく、人類の歴史と人々の人生を治めて下さる神様の主権と統治をよく表して下さる聖書です。
エステル記では神様の名前は一回も出ていません。それにもかかわらず、エステル記を読んでいくうちに、“見えな
いところにおられる生きておられる神様”を鮮明に表してくれます。エルサレムを離れ、遠い異国の地でたとい捕
虜の生活だとしても、神様はご自分の民を守り導いて下さいます。その神様がいまも我々を守ってくださっていま
す。我々がどこにいても、どんなに苦しい状況に置かれても、人の力では希望がなさそうな瞬間でさえも神様は
我々とともにおられます。

二つ目に、エステル記は神様の宇宙的な主権と統治を表してくれます。

創世記、出エジプト記から始まる旧約の聖書、そしてエステル記では神様を信じてない民だとしても関係なく神様
の民たちの問題を解決するようにと用いて下さいます。エステル記においても神を知らなかった、ペルシアの王
アハシュエロスもそうではありませんか? 神様は信じる民の中だけ働かれる制限させる神様ではありません。
すべての民族と全世界に、全人類の歴史においても干渉し、治めておられる神様の主権を我々はみなしなければなり
ません。神様に従わず、罪を犯したイスラエルの民を回りに国々を用いて懲らしめる時もあり、ペルシアのクロス王
をとおして、イスラエルユダ民族の帰還と解放を宣布させる時もあり、今日アハシュエロス王をとおして集団虐殺
の危機から神様の民を救い出させてくださる時もあります。

愛する信仰の家族のみなさん! これらのすべてが偶然や運が良くて起こったことでしょうか? 生きておられる神様
の絶対主権のもとで、神様のご計画にしたがって起こったではありませんか。我々が経験するすべては偶然でし
ょうか? 神様は今日も我々の人生においても介入して下さいます。どこに行っても神様はそこにおられます。神様は
宇宙の神様です。そういうわけでダビデはこのように告白します。「(主は)たとい私が天に上っても、そこにあな
たはおられ、私がよみに床を設けても、そこにあなたはおられます。私が暁の翼をかけて、海の果てに住んでも、
そこでも、あなたの御手が私を導き、あなたの右の手が私を捕えます。」(詩篇139:8-10)」

三つ目に、人間の計画と意図が決して神様の御心とご計画よりまさることはないことを表します。

ハマンはモルデカイを殺して、それだけでも足りなくて、ユダヤ民族を根絶やししようとしていましたが、人間の計画
はかなえられませんでした。彼はモルデカイを木の柱にかけて殺そうとしていましたが、まさに自分がかけられるとは
思いもしなかったと思います。モルデカイとエステルがどんな良い計画をもって死ぬ覚悟と決断をしたとしても、
信仰によって神様に断食しながらも、求めなかったなら、エステルやモルデカイも殺される運命ではありません
でしたか?

しかし、結局神様はご自分の御心に導いてくださったので、運命が変わって逆転されたのでは
ありませんか?!! 人間の計画と意図は決して神様の先にはなりません。人がどんなに悪を企んだとしても神様はご自分の計画の中で
働かれます。エステル記では一度も神様の名前が出ていませんが、結局、人間の思い、人間の背後で働き、成して
下さる神様がおられることを見ることができます。

最後にエステル記を通して、続けられる神様の救いの御業を見ることが出来ます。

最後に神様の救いを覚え、感謝するプリムとして新しい日が定められます(エステル9:20-10:3)。この日は過ぎ越し
のまつりのようにこんにちもイスラエル人は記念して神様の救いを思い出しています。イエス・キリストを信じる
ことによって救われた我々はどんなに神様の救いを覚えて感謝と喜びをささげ、喜んでいるのでしょうか?
何の力のない捕虜の身分ですが、神様を愛し、神様を信じて従っていた神様の民を危機と苦しみと死の絶望におか
れている状況から救い出してくださる神様の救いはエステルの時代だけではなく、いまも続けられています。

“死ななければならぬのなら、死にます。”このエステルの決断は“もう死んじゃえば良いのか”見たいに、ど
うしようもできない自分の人生をあきらめている内容では決してありません!“死ぬ覚悟でやればできない事はある
だろうか。”というただ自分の志とか覚悟程度でもありません。
救い主の神様が今も、これからも絶対に見守ってくださる事を信じ、ゆだね切っていた絶対信仰による告白であり、
信仰の決断でした。我々の目には見えませんが、いまもなお神様は我々を守り、導き、救いをなして下さっていま
す。愛する信仰の家族のみなさんは救いの神様のみが今も我々を守り、危機の中においても避け救われる道を与え、
我々の全領域を治め、一人の魂も永遠に死なないで、救おうとおられる神様は今も働いたおられる事を信じ切っ
ていますか。“死ななければならぬのなら、死にます。”という絶対信仰を保っていますか。

もう11月が今日で最後になり、また明日から今年の最後の12月が始まります。救いの主がこの地に来られた
クリスマスが近づきます。願わくは、神様の御守り、神様の統治、エステル、モルデカイのような死ななければ
ならぬのなら、死にます。という絶対信仰の決断と勇気を持って神様の救いを成して行かれる働きに大いに用いら
れるクリスチャンプレイブチャーチの信仰の家族となりますよう主イエス・キリストの御名によって祝福します。
アーメン!